

文化財 ニュース

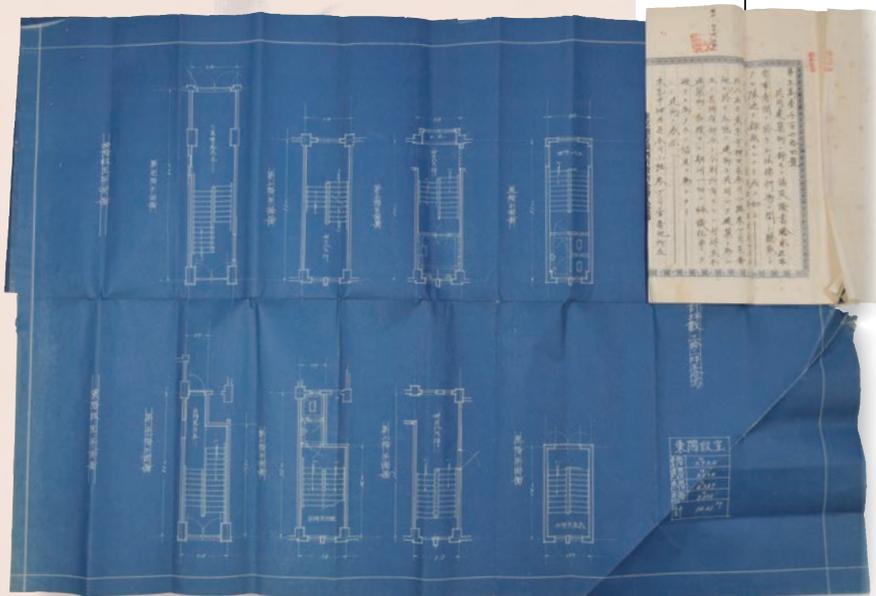
33 Summer 2024

特集

新指定文化財の紹介

区では令和6年4月1日付で2件の文化財を指定しました。(1件は追加指定)

今回の文化財ニュースでは、新たに指定された文化財について紹介します。



有形文化財（古文書）

今川小路共同建築関係文書 （追加指定）

2点 千代田区蔵



有形文化財（書跡）

絹本墨書掛軸「日枝神社」 山岡鉄舟筆

1幅 千代田区蔵

Index

- 1-3 特集
新指定文化財の紹介

- 4-5 千代田文化遺産
「有楽町層」を知っているかい(貝)?
一丸の内・有楽町には海があったー

- 6-7 日比谷ミュージアムガイド
体感! 江戸の生活

- 8 文化財事務局通信
こんなこともやっています
～遺物の洗浄～

今回指定となった文化財は、「幕末の三舟」ⁱと呼ばれ、書の名人のひとりとして数えられる山岡鉄舟が揮毫した社号の掛軸です。関東大震災、戦災といった度重なる苦難を乗り越え、地域の中で大切に保管され、利用されてきたものとして、新たな指定文化財に選ばれました。

山岡鉄舟とその揮毫

山岡鉄舟（本名・鉄太郎）は、江戸城無血開城に尽力したことで知られています。維新後は明治天皇の侍従などを歴任し、官を辞した後も剣術、禅、そして書の分野で活躍しました【写真1】。今回の掛軸は落款から明治18～19年（1885～1886）頃の、退官後の揮毫と判明しています。

鉄舟の揮毫は生前より評価が高く、潤筆料ⁱⁱをもって再興した寺院が全国各地にあります。また、一日のうちに数百枚の揮毫を行ったとも伝わるため、かなりの作品が現存している反面、人気があったことから贋作も多くあります。この掛軸は文化財指定に向けて、専門家による調査を行い、鉄舟の真筆であることが確認されました。

現在も人気のある書家のひとりですが、筆の勢いや文字のバランスなどの作品としての充実が、晩年にしてなお勢いのある鉄舟らしい書跡となっており、美術的価値を有する作品として評価の対象となっています。



【写真1】山岡鉄舟（1836～1888）

『近世名士写真 其2』近世名士写真頒布会、1935
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

山王祭で使用されてきた珍しい掛軸

この掛軸は、山王祭において祭礼用具として利用されてきたという来歴をもちます。詳しい伝来は不明ですが、掛軸の箱に書かれた内容によると、元々麴町八丁目町会に伝来したものが、関東大震災後の区画整理によって誕生した麴町五丁目町会に引き継がれました。現在は町会から区に寄贈されましたが、それまでは麴町五丁目町会の神酒所の掛軸として長年利用されてきました【写真2】。鑑賞用としての山岡鉄舟の作品はよく聞きますが、祭礼に利用するというのは珍しい事例になります。山岡鉄舟と区内の地域との結びつきを示すという点も、高く評価されました。

（学芸員 山田 将之、井坂 綾）



【写真2】神酒所での使用の様子（令和4年撮影）

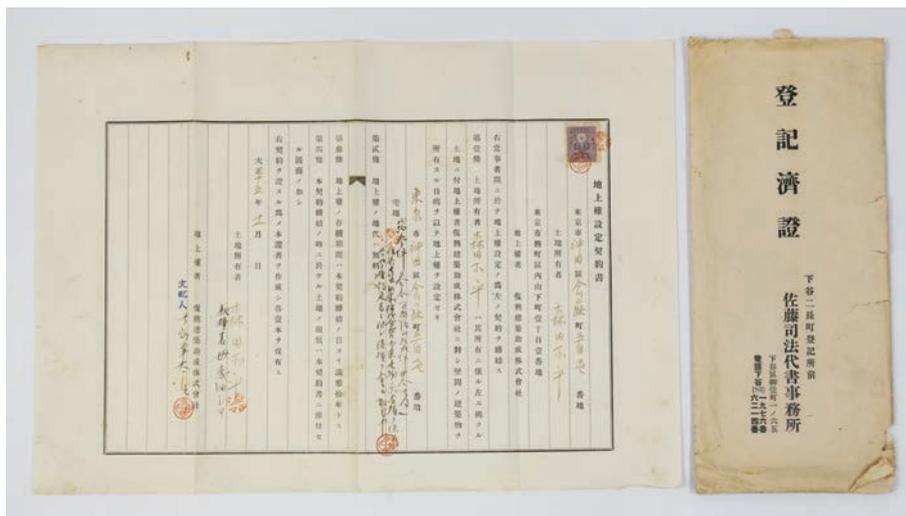
今川小路共同建築にゆかりのある森田千秋氏より令和4年度（2022）に寄贈を受けた資料9点のうち、令和元年度（2019）に区指定有形文化財（古文書）に指定された今川小路共同建築関係文書の価値を高める資料として、今回2点が追加で区指定文化財に指定されました。追加指定された資料の内容がどのようなもので、どこが評価されるのかをご紹介します。今川小路共同建築関係文書について、詳しくお知りになりたい方は、右のQRコードから『文化財ニュース 第21号』（千代田区立日比谷図書文化館文化財事務室、令和2年7月10日）をご参照ください。



地上権設定契約書

【写真3】

大正15年(1926)11月に、土地所有者と地上権ⁱⁱⁱ者である復興建築助成株式会社との間で締結した、地上権設定をめぐる契約書です。令和元年度に指定された資料には、建設用地の利用に関する契約書は含まれておらず、土地の権利関係を辿ることが難しい状況でした。本資料は、用地をめぐる契約手続きの一端を明らかにする資料として価値を有しています。



【写真3】 地上権設定契約書

共同建築物二対スル協定証書正本

【表紙左側写真】

昭和4年(1929)10月19日に、今川小路共同建築における共有部分の利用に関して、区分所有者8名と復興建築助成株式会社の計9者で結んだ協定書です。建物居住者間の建物利用をめぐる紛議抗争を防ぐことを目的として8つの協定が結ばれました。例えば、連名者全員の承諾無しに通行の妨げとなるものを設置できないことなどが記されています。令和元年度に指定された資料には含まれていなかった、居住者の実態をうかがえる資料として注目に値します。

上記資料2点は、これまで明らかになっていなかった建設用地の権利関係や、居住者による建物利用の実態を示しています。すでに指定されている文化財の資料的価値を一層高めることができる点で貴重な資料ということが出来ます。

(学芸員 平町 允)



【写真4】 建物の全景（『今川小路共同建築二就テ』（南建築事務所、昭和2年8月10日）より）

今川小路共同建築は関東大震災後の昭和2年（1927）に建設された震災復興建築の1つで、老朽化により解体される平成24年（2012）まで神田神保町三丁目に現存していました。

- i 幕末に活躍した幕臣で書家としても活躍した勝海舟・高橋泥舟・山岡鉄舟の雅号に「舟」が入ることから、名跡を表す三筆をもじって「三舟」と呼ぶ。なお幕末の三筆は三井親和・市河米庵・貫名菘翁のこと。
- ii 揮毫に対する謝金のことを、特に潤筆料と呼ぶ。
- iii 他人の土地に工作物などを設置するため、その土地を使用する権利のこと。



この貝化石は何でしょう?

有楽町における貝化石の発見

皆さんは「有楽町層」という地層を知っていますか? 区内には地層名に「有楽町層」と名付けられるきっかけとなった発見がありました。いまから 100 年以上前の明治 41 年 (1908) に有楽町の三菱 12 号・13 号地 (現在の丸の内三丁目) 工事現場において、地表面下 5 m の深さから完新世 (約 1 万 2 千年前から現在まで) の貝化石が見つかりました【図 1】。この貝化石は、東京大学の山川^{ゴルドン} 戈登によって貝化石の分析が行われ、その結果が論文に掲載されました。出土した貝化石にはハイガイ・サルボウ・マガキ・ヤマトシジミ等の内湾や干潟に棲む貝化石が含まれます。その後、昭和 4 年 (1929) に東京大学の地質学者である大塚彌之助によって、東京付近の完新世の地層として「有楽町層」という名称で紹介されました。



【図 1】 千代田区の地形と有楽町層の貝化石出土地点 (国土地理院発行の治水地形分類図に加筆) ※ SPA-A' は、おおよその位置になります。

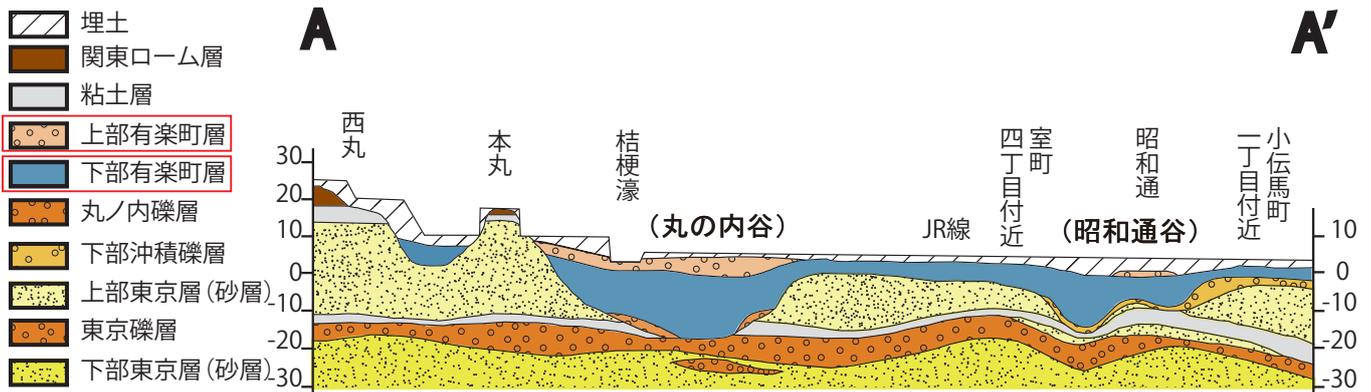
有楽町層の特徴・形成時期

有楽町層等の低地に堆積する地層については、大正 12 年 (1923) の関東大震災後に、復興局が地質調査を行い、その特徴をまとめました。一般的に、有楽町層は関東ローム層と比較すると、軟弱な地層として考えられています。復興局の調査以降も東京の低地における地層の様相や地盤強度等が調べられ、現在では有楽層は主に 2 層に分けられています。海成のシルト・粘土層を主体とする「下部有楽町層」と泥炭や砂礫層を主体とする「上部有楽町層」です【図 2】。色は、青灰色やオリーブ色等をしていることが多いです。層の厚さは、例えば丸の内・有楽町では、下部有楽町層が約 5 m ~ 20 m、上部有楽町層が約 1 m ~ 5 m となります【図 2】。



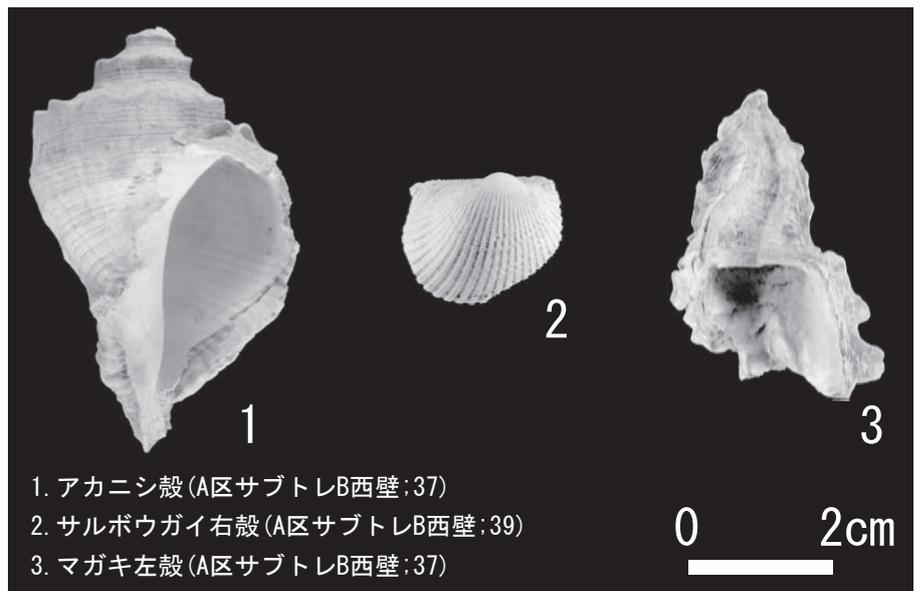
この貝化石は何でしょう？

同じ「有楽町層」でも、場所によって層の厚さや含有物が若干異なります。日比谷図書文化館の常設展示にある「溜池遺跡」の剥ぎ取り標本では、江戸時代の盛土下に堆積する「有楽町層」を見ることが出来ます。完新世以降の海面上昇は、いわゆる「有楽町海進」や「縄文海進」と呼称されていますが、この海面変動は氷河の消長（氷河性海面変動）に伴うものと考えられており、約7000年前頃を海面上昇のピークとして海面が低下し、現在の海岸線に近づいていきます。この時期から有楽町・丸の内にあった「丸の内谷」を河川から運ばれた礫・砂・粘土等が徐々に埋めていきます。



【図2】区内東西方向の断面図（千代田区史上巻掲載第4図に加筆）

有楽町層には、貝化石や海棲哺乳類の化石が含まれています。例えば、国際日活会館（現・ペニンシュラホテル）ではサルボウ・ナミワガシワ等の貝化石が出土しており、和田倉門近くの三菱商事ビルではイルカの化石が出土しているようです。発掘調査でも貝化石を含む有楽町層が確認されており、有楽町一丁目遺跡では、アカニシ・サルボウ・マガキ等の内湾や干潟に棲む貝化石が出土しています【写真1】。



1. アカニシ殻 (A区サブトレB西壁:37)
2. サルボウガイ右殻 (A区サブトレB西壁:39)
3. マガキ左殻 (A区サブトレB西壁:37)

【写真1】有楽町一丁目遺跡の有楽町層出土の貝化石『有楽町一丁目遺跡発掘調査報告書』

環境変化を記録した地層

区内だけを見ても有楽町層の様相は若干異なっています。溜池周辺と有楽町・丸の内エリアを比較すると出土する貝の種類やその量、破碎の様子等は異なります。おそらく、同じ「上部有楽町層」と呼称される層でも、堆積した当時の環境（内湾、河口、低湿地等）の違いから土質や含有物の様相が異なっているのではないかと考えられています。

また、溜池遺跡の調査では完新世における埋没状況が調べられています。溜池遺跡周辺は、約7000年前の海面上昇により、溜池周辺は小さい入江の湾口となり、河川によって運ばれた砂や礫が小規模な砂洲を形成しました。その後、入江の内は潟に変わり、さらに泥炭が堆積し、約2800年前以降に湿地を形成します。湿地は、江戸時代に整備され「溜池」と呼ばれることとなります。

残念ながら、有楽町層が常に露出した状態で観察できる場所がありませんが、完新世以降の環境変化を記録した地層であり、今後も調査と記録を続けていきたいと思えます。

(学芸員 濱口 皓)

日比谷ミュージアムガイド 体感! 江戸の生活

令和4年の改修によって、常設展示室Ⅳ室には四畳間の和室が造設されました。ここでは江戸の出版文化を紹介する目的で、絵草紙屋の帳場周りが再現されています【写真1】。令和6年1月からは、江戸時代の生活空間を紹介する展示を行っています。浮世絵などに残された江戸の人々の生活の様子【図1・図2】を紹介し、歴史を体感できる展示を目指しています。



【写真1】当初の和室の様子



【図1】長火鉢が描かれた浮世絵（歌川国芳「時世粧菊揃 つじうらをきく」国立国会図書館所蔵）

1月の展示替えでは、江戸時代の熱源が「火」であることに着目し、長火鉢と有明行灯から着想していった生活の様子を再現しました【写真2】。

また、生活感を出すために、柄鏡や鏡台、筆筒なども展示しました。筆筒の上には雛人形や五月人形などを出すことで、季節感のある展示ができるようにしました。

5月からは「夏のくらし」をテーマに、夏の恒例行事であった虫干しの風景を再現しています。



【写真2】1月から替えた展示の様子



【図2】虫干しの様子(水野年方「三井好都のにしき 土用干」都立中央図書館所蔵)

虫干しは衣類や書物、茶道具や室内調度など普段箆笥こすりや行季などへしまい込んでいるものに風を当てることで、湿気を飛ばしてカビや害虫の発生を抑える目的で行われます。土用干しばくや曝書しよとも呼ばれ、晩夏（7月～8月）の季語にもなっています。現在でも衣替えの際の風通しを行うことがありますが、生活空間の変化や近年の異常気象などにより、虫干しそのものが夏の風物詩とは呼べなくなっています。

再現に当たって江戸時代の風習や習慣を取り上げた資料を参照していくと、当時の虫干しの様子の特徴として部屋に紐を渡し、着物を吊っていることが挙げられます【図2・右上】。

展示でも衣桁いこうに着物を掛けるだけではなく、実際に部屋の柱を使って紐を渡し、浴衣を掛けて江戸の生活を再現しています【写真3】。他にも婚礼衣装のように、箆笥や行季にしまったままにしそうなものを干し、夏の風や空気感を表現するために江戸風鈴も一緒に掛けています。

帳場側にも、これまでなかった夏を象徴する道具や、夏の情景を描いた浮世絵が登場しています。これまで見たことがある方も、そうでない方も、ぜひどこが変わっているのか探してみてください。これからも、四季折々の江戸の生活を伝えていければと思いますので、ぜひ足を止めてご覧ください。（学芸員 井坂 綾）



【写真3】5月から替えた展示の様子

こんなこともやっています ～遺物の洗浄～



遺物洗浄の様子

文化財事務室では、区内の遺跡から出土した遺物を保存するために、様々な作業を行っています。今回は、その最初のステップである遺物の洗浄について紹介します。

発掘調査で出土した遺物は、土や泥が付着しています。そのままの状態では保存すると、乾燥した土が遺物を傷つけたり、カビの温床になったりして劣化が進行してしまうため、洗浄を行います。洗浄

によって遺物の表面から絵や文字、模様などが見えてくることもあり、こうした情報が今後の研究に役立つことも期待されます。

洗浄を行う際は、遺物の種類に応じて、適切な洗浄方法を選択します。一般的な方法としては、ハケや歯ブラシを使用しながら丁寧に水洗いや、湯洗い、アルコール洗浄などで汚れを落とします。一方、水洗いをするると溶けてしまう可能性が高い土器や布製品、腐食の激しい鉄器や骨などは、表面の様子を観察しながら部分的な汚れの拭き取りだけを行います。その後、洗浄を終えた遺物は、十分に乾燥させた後に梱包して収納します。

洗浄は、一見単純そうな作業にも見えますが、資料の特性や状態に応じた注意が必要です。みなさんが博物館施設などで遺物を鑑賞する際は、このような工程を思い浮かべながら、見て頂けたら幸いです。 (学芸員 山田 暁也)



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
土 10時～19時
日・祝 10時～17時

文化財事務室 月～金 10時～18時 文化財ホームページ

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第33号 (3,000部)

発行日 令和6年7月31日

編集 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
https://www.edo-chiyoda.jp

発行 千代田区教育委員会

印刷 日本印刷株式会社



文化財ホームページ